

# 古都風

51

Tomoe Sawano  
澤野ともえ

一般社団法人 文化浴の森代表  
トータルフットケアアドバイザー

チヨット歯見第79回



①



## 足元で見つけた「ライフワーク」

家業は桂離宮など京都をはじめ全国の文化財の保存修復を手がけていた文化財修復業。「漆芸家の修行をしていた父が、その技術を求められ文化財の修復を始めたのが昭和40年頃。私が物心ついた時には家が仕事場で、漆の匂いは強烈ですし、何気に置いてある仏像の顔は朽ち果て、怖い、汚いという思いしかなかったんですよ」とおおらかに笑う澤野さん。しかし大人になり、いざ文化財修復の現場に入ると、それまで遠巻きに見ていた世界が一変した。「細部に宿る文化財の素晴らしさ、それを身近にしてくれる数々の情報やエピソード…そこには現代につながる人々が生きてきた証がありました。教科書で学んできた政治の歴史とは違う魅力にあふれていたんです」。もともと仕事で身を立てたいという思いが強く一般企業に就職したもの、未来が見出せず悶々としていた時期に、ふと見つめ直した家業。ちょうど職人の口伝やスキルに頼らない会社組織としてのステップを上る段階にあり、「筆や刷毛を持たない自分にも活躍の場があることを知ったのが、飛び込むきっかけとなった」という。たちまち文化財のとりこになり、夢中で学びながら営業、経営、雑務、管理など多岐にわたる業務を引き受け精力的に動いた。そして、何度も現場に足を運ぶうちに至ったのが「文化財はセラピーである」という発想。「大学では心理学も勉強していましたが、文化財にはどんなセラピーにもまさるほど、多くの癒しの要素が入っているなと感じたのです」。文化財を人々の心の役に立つよう発信していきたい。そんな思いで、社内に広報を兼ねたカルチャーサイエンス部を立ち上げたのが2006年。回を重ねるごとに参加者も増えて発展していった。やがてはカルチャーセンターや旅行社からも声がかかり、外部企画の文化講座でも引っ張りだこの存在となった。

「歯に関しては、検診でいつもクリア、中学時代は表彰されたほど丈夫です。何でも食べられることがありがたく、維持していかなければと口腔ケアには気をつけています。舌や歯茎までしっかりとお手入れするのがこだわりでしょうか」

心身の健康を保つ「文化浴」を提案。  
文化財修復に携わった経験と知識、  
フットケア専門家のスキルを活かし

## 文化財を 心巡り歩けば 癒される



京都で文化財修復業を営む家に生まれる。大学卒業後、一般企業勤務を経て家業に。2006年、文化財活用事業「圓塾(えんじゅく)」を立ち上げ、文化財ウォーキングガイドとしてカルチャーセンター講師やツアーガイドとしても活躍。また自然療法フットケアを学び、フットケアアドバイザー、ウォーキングセラピスト、シューズセラピストの資格を取得。2012年女性専用自然療法フットケアサロンTomoyeを開業。2016年にはふたつの事業を融合した「一般社団法人 文化浴の森」を設立。そのビジネスモデルは第5回京都府女性起業家賞にて京都府知事最優秀賞を受賞(2017年)。一般社団法人 文化浴の森 <http://bunkayoku.com>



①ウォーキングセラピー ②フットセラピー ③シューズセラピー ④京都文化浴さんぽ



⑤京都文化浴さんぽ

## 文化財+ウォーキングでセラピーを

当初は一ヶ所の修復現場を案内して解説するというスタイルだったが、ひとつの文化財だけを案内するのではなく、町歩きや食事もセットにしてほしいという需要が高まってきた。「京都には昔の道や文化がそのまま残っていることが多いので、歩くことで点が線になり、面のドラマが見えてきます。無限にあるその楽しみを提供するために、私自身、もっと町を知ることが必要に。下見で2万歩3万歩と歩く日もあるくらい、とにかくよく歩き回るようになりました」。しかし、ここで思わぬ弊害が。もともと抱えていた外反母趾をはじめとする足腰のトラブルが相まって、歩くことが苦痛な状態になってきたのである。そこで改善策を求めて学んだのが、自然療法フットケアであった。「足と靴と歩行は相関関係にあるというメソッドに沿って、全体でバランスを整えていく手法です。すると、じわじわと筋骨格系が整い、身体が中から変わっていく…いくら歩いてもへっちゃらになったんです」。より多くの人に広めたいという思いからフットケアアドバイザー、ウォーキングセラピスト、シューズセラピストの資格を取得し、2012年に女性専用の自然療法フットケアサロンをオープン。シニア層が主であった文化財講座の参加者にも、そのスキルは大いに歓迎された。文化財をセラピーとして心の健康に活かし、足と靴と歩き方を整えて美しく歩くことで身体の健康をサポートする。双方からのアプローチは、まさにQOL(Quality Of Life)の基盤になると確かな手応えを得た澤野さんは、これを融合させ法人化することで充実を図り社会的責任を果たすべく、会社の一部門から独立する決意をする。そして2016年に誕生したのが、「一般社団法人 文化浴の森」。社名には、文化豊かな京都の町を森林浴のように心と身体を癒す「文化浴」の森に見立て、正しいウォーキング方法で巡ることで心身健康的な健康を目指すという世界観が託されて

いる。メールマガジンでの情報発信や「京都文化浴さんぽ」「ウォーキングセラピートーク会」などの活動を通して、着実にファンを広げてきた。

## 京都をセカンドライフのフィールドに

現在、新たに着手しつつある次なる構想が「シニア大学」である。「参加されるお客様のほとんどがシニア層。セカンドライフの拠点として、もっとみんなが自主性をもって楽しめる場をつくりたいという思いがありました。4年制の学び舎というスタイルをとれば、より具体的な目的をもって参加していただけるうえ、楽しみをわかちあう仲間とのつながりも生まれます。退職後の男性にもたくさん参加していただいて、わくわくと文化的なセカンドライフを送っていただける場にしたいですね」。すでに今年9月から0期生として、これまでの会員を対象にした活動をスタート。試行錯誤をしつつカリキュラムを固め、来年4月の開校を目指している。「職人さんや在野の専門家とのつながりなど、これまでに得てきた貴重なネットワークを活用し『ここでしかできないこと』にも力を注いでいきたいです。私にとって京都はキャンパスであり、ウォーキングスタジオ。さまざまな場所で先人の知恵や技、心を五感でとらえ、時空を超えるような感動体験を重ねて心身の健康を育んでいただきたいと思います」。また、その根底には文化財修復業の現場で感じてきた文化財保護への切実な思いもある。「貴重な文化財を形骸化せず、未来へ守り継いでいくためには、『保存』と『活用』の両輪がないといけません。少しでも多くの方にその意識をお伝えするには、サービス精神旺盛に魅力を発信していくポジションが必要。その部分を、微力ながらも担っていくことができれば」。固い意思をやわらかな表情に秘めて、澤野さん自身が放つオーラもまた、かかる人々の心身を満たしてくれそうだ。